

《史料紹介》

徳山敬猛『農業子孫養育草』（文政九年）——原本による翻刻

神 立 春 樹

私は本誌第十四巻第一号（一九八二年）に「徳山敬猛『農業子孫養育草』（文政九年）」という小論を掲載した。

この徳山敬猛の『農業子孫養育草』は、すでに、小野武夫編『近世地方経済史料』第四巻（一九三二年）に収録されていて、「有用の書」として解題されている、世に知られている農書である。しかし、そこには『農業全書』『農稼業事』に類似した点も少なくない」とされているが、先の小論では、この『農業子孫養育草』を、宮崎安貞の『農業全書』と照合し、それからの大幅なビック・アップによって成りたっていることを検証した。このようにオリジナリティーに乏しい農書であるが、しかしそこには独自の項目記述があり、その意味と、『農業全書』からのビック・アップの仕方自体は検討にあたいする事柄である。また、それとは別にこの徳山敬猛『農業子孫養育草』（文政九年）がその二年前の文政七年の『農業子孫養育草控』と大きく異なっていることを明らかにしたが（「徳山敬猛著『農業子孫養育草控』」本誌第十四巻第二号 一九八二年）、この変化の意味も検討にあたいする。このような課題がある。

先の小論はこの農書の新しい筆写本による翻刻を行なったものであった。『近世地方経済史料』第四巻に収

録されたものは、小野武夫氏の筆写本を底本としたものであった。本書は明治十年代に農商務省に進達されたが、それは関東大震災に遭遇して灰塵に帰してしまった。小野筆写本そのものはない。この小野筆写本によつた『近世地方経済史料』のものが唯一のものであった。ところが、この農書を、福島県会津若松の初瀬川健増なる人物が農商務省において筆写していた。この初瀬川筆写本が原本に最も近いものと思われた。先の小論はこの初瀬川筆写本にもとづき翻刻したものである。

それから数年たった。徳山家には近世期を中心とした四千六百余点の文書があり、それは徳山家文書として岡山大学附属図書館に寄託されている。同家には敬猛時代に収集された書物のほか若干のものが残されているだけであるが、この書ができたという連絡をうけた。それはまぎれもなく敬猛の直筆のものである。本稿はこの自筆本をもとに新たな翻刻を行なうものである。

また本稿では、先の小論と同様に、宮崎安貞著『農業全書』と照合し、引用などしたと思われる個所を記載した。なおこの『農業全書』とともに類似した個所が多いとされる『農稼業事』については同様には行なわなかった。徳山家の「蔵書目録」には文政元年のもの、明治期のものいづれにも『農業全書』は記されているが『農稼業事』はない。徳山敬猛はこれを見ていないであろうと思われる。

翻刻にあたって

- 一 底本には、徳山敬猛自筆本を用いた。
- 一 底本の文体、仮名づかいは原本のままとした。ただし、変体仮名はひら仮名に改めた。
- 一 底本の漢字は新字体に、異字については現在の字体とした。ただし、并、抔、ホはそのままとした。

- 一 底本の漢文体の部分はそのままとし、返点の有無もそのままとした。
- 一 句読点をつけ、清濁はそのままとした。
- 一 行間記入箇所は( )をつけ、本文に組み込んだ。
- 一 底本の文中の二行割注などについては、小文字とし、一行割注とした。
- 一 底本にあるふり仮名はそのまま残した。また漢字の左側についた仮名は二行に組んでへゝで囲み、その漢字の下に入れた。

『農業全書』との対比照合

- 一 これには『日本農業全書』(山田龍雄編集、農山漁村文化協会)の第十二・十三巻所収の『農業全書』(翻刻、校注等山田龍雄ほか、一九七八年)を用いた。ページ数は第十二巻のそれを示す。
- 一 この『農業全書』にはふり仮名が附されているが、ここでは一切省略した。

## 農業子孫養育草

## 『農業全書』

## 農業子孫養育草序

先大父本名清延翁は、子孫為相統、稚子遺教抄を著述し玉ふ。予ハ彼書を熟読信用して、勤慎約(ミクケンヤク)の三ヶ條を守り、漸く星霜を歴耳したかへる年の後、隱遁と成二階に独居して閑寂(シツカ)を樂ミ、情思へらく我世渡りに千辛万勞を尽せし事に思ひくらへ、子孫ハ安樂に為暮たく明暮思惟して遺教抄を考ふレハ、第四卷目(一)經曰ク、三界無安、猶如火宅、衆苦充滿、甚可怖畏(サンガイハヤスキコトナシナニラクハタクノゴトシンユ)と説示シ給へり。三千世界に安樂なる事ハなく、焼ル家の内ニ座スこと、衆生(モロ)の苦患世の中に充滿て、諸国里々浦々嶋々山の奥迄此世界に住ルもの一人も苦勞患難なきものハなし。甚タ恐ルへしとの御示しなり。如斯此世に生るゝ者、皆々苦勞のなきものハなし。其中ニも人ハ万物の長として鳥獸虫魚にくらふれハ其苦輕くして樂ミ多し。仏も三界無安と説給へハ苦ハ世界に充滿シて通るゝ道なし、逆も可遁やうなきからハ早く覺悟して苦勞ハ世並人なミの事と兼て諦メ其覺悟さへよけれハ、苦勞も苦にならず誠ニ苦ハ樂の種といふ事至て金言なり。諺にも若キ時の苦勞ハ買てもせよと、自前ノ道理なり。爰を以て其覺悟の仕様を考へ世の中を觀るに、農工商の三民千變万化の世渡なれ

とも、商家などにて一ツ旦繁昌するといへとも三代と相続せし例シ少し。寧シ（ソレガヨシ）農業の外安シ氣にくらし子孫長久の秘伝シハなし。農家におゐては数代相続の者多し。此詠を子孫に教訓シせはやと思へとも、口シに述る教へハ当座のミにて後日の功なし。亦遺教抄ニ誠心シ正意シ修身シに至るまで詳シに千言万語を述へ給へハ、今更我ホことき何いふへくもなし。されと遺教抄にも農業に限りたる遺訓シハなし。去によつて当家先祖より代々相続の農法 数代なれハ略し、只今存シへ生シの敬寛中にも農功アリ。田地開発の成功を子孫に伝シため、石塔に鐵シを持し老人ノ（婆）を切付たり。此心を感心スシへしを無シ惰怠シいとシなミ勤シなバ幾代も相続すへしと、日頃の工夫に四寸の胸中をいたミ、愚者も千慮すれハ一ツ徳ありといへる語にもとつき、千慮ハをろか万々慮を尽しても無知短才の老悖シよき分別も出ぬ。折ふし過しシ頃農業全書を粗シ（マシ）見侍り、且ツ久世條教の旨を伺ひ、近郷に老農シ（百姓の）の説を聞、功あるを取ましへ、予か尺寸の試シ覚あるを加へ、此土地にシ応すへき要を拾ひ、農業子孫養育草と号て子孫に授与す。しかハあれと、吾本より無学なれハ著作の才なくたゞ魯魚の誤シ多からん。はた文詞を飾シる事あたハす。（仮名ハいゝるひ、ゑへ、うふ、やうよう、をお、の違ひ多かるべし。）かなつかひも知らざれとも、此書ハ偏シに農家の為シに用る事なれハ、文首の耳目シに通し安シからしめんシと、此辺通用の俗語シにうつせり。此書真名字の左にかなを付タハ農人見安き為

：我愚蒙を忘れて、種シ植の書をあらハして、民と共に是シによらん事をおもひ、唐の農書を考へ、本邦の土宜シ（つちよ）にしたがひ、農功の助となるへき事を撰び、或は畿内諸国に遊視し、広く老圃老農に詢謀、草稿を集めて十巻とし、農業全書と名付侍へる。されど本より著作の才なければ、たゞ魯魚の誤シり鄙俚の言多きの

なり。字心少ハたかふ事もあるへし。心得ありたし。○愚老カ子孫を憐ミ農術  
 におゐて当地の土宜トキにしたかひ、万カ一の助タメとならんことを思ひ、  
 管見カンケンの及ふところを書綴カキツゞれハ、或人は楽隠居ラクインのよき慰ナグサといへり。  
 全く左にあらす。なくさミなれハ目に及ひたる仮名本、軍書ホ、又ハ当  
 座タムレの戯シに言捨フクセし口癖クハクセの狂歌、をこかましき咄ウタの類ハ、人か笑ふと誹シラ  
 ふとまゝのかわ、我心だに面白けれハそれか気晴し保養とも云フへし。  
 仮初カクソメにも末の世にのこし子孫を稼穡カシユク（さく）に導ミチき、家相統ケサウの便マニにもな  
 れかしと、愚意グイを勞オロス事疎オロソならず。是につけても遺教抄ウイコウの大部に數  
 年肺肝ハイカンを碎クサき、序跋シヨバツに子孫を厚アツクくいましめ置れし先大父センダイフの心中を思ひ  
 廻マヅせは、有ナかた泪ナミかこぼるゝなり。此書ハ遺教抄ウイコウにくらぶれば著作テウサク  
 心勞シンラウ十分シツブツか一にもあらず。然とも分相應ブンソウオウの風か吹とて、太鼓タイコハ大このこ  
 へ、尺八シヤクハチハ尺八シヤクハチのこゑなれハ、予ボクか分際ブンサイにて子孫を恵シむ慈悲シイに迷マヨひ心  
 意イを勞オロせし志シを推察スイサツし、又先祖コノソコが代々タトヘ農事ノウジの成功セイコウ高恩コウオンの余沢ヨウタクによつ  
 て只今の子孫コノコ足タる事コトを知らハ、衣食住イシヨクヂウ（ギルモノクイ）の不足フソクハなし。常々  
 此恩儀コノオンギを不忘オウボウ有ナかたスレく思オモひ、ますく農業ノウガクを励ハげミ工夫コウフを篤ツツくし其勤シ  
 精力ケリキを尽ツツし修練シユレン會ヘ得トクせは、農ノウに熟ジュクし中ナカにハ文才モンサイの者モノもあらん、亦世オホ  
 億兆イッテウの農家ノウカなれハ、必カナラシ大功コウコウの智者チンヤも有アへし。是コノホに尋問ジュンモンひ猶ナカ此書コノシヤを増補ゾウボ  
 し子孫コノコの益エキたらん事をコト希ネガひなハ、自然シゼンと天道神明テントウシンメイの冥慮メイリョにも叶カナひ祈イノ  
 らされとも福サイハヒひは来らん。嗚呼アハ、大哉トク。農ノウの徳トクを称シヤウし、家業カゲウ大

ミカハ、其義理も亦菌莽キノムサにして疎謬ソミョウ多オホか  
 らん事を恐る。  
 (二一ページ)

一吾本より文才モンサイなくして文詞モンジを飾カズる事あ  
 たハズ、且此書ハひとへに農家の用る  
 所なれば、あながちに文辭モンジを華麗カワライにす  
 べきにあらす。楽軒翁ラクケンウも又其辭モンジを野に  
 して、衆民シュウミンのさとしやすからん事を思  
 ひ、皆俗語カクゴにうつせり。  
 (二六ページ)

一後來文才モンサイ余り有て、且農事に熟ジュクしたる  
 人あらバ、猶此書コノシヤを増補ゾウボし、弥民ミミンの益エキ  
 たらん事、予ボクが微賤ミケンに在て、世を思ひ  
 農をめぐむの素意ソウイにして、尤希トクふ所な  
 り。  
 (三〇ページ)

明神先祖大菩薩と尊ミ敬ひ信仰すれハ、御利生ありて万代不易農業  
 子孫養草ハ五風十雨の恵にて、四方にはひこり栄エくて時をたかへ  
 す、安くあられき泰平の御代に生レぬるありかたさには、子孫永々よろ  
 つ代の春をむかへ（よ）かしと、謹て序す。時ニ文政九年水無月の陽  
 日なり。

徳山 敬猛

行年六十五歳書之

此書の発端に六十を暦て思ひ立して書たるハ子孫の恩愛に迷ひ安楽にくらさせたく  
 思ふて興を入しなり。本より農事を一大事と思ふゆへに、養父（当戊八十四歳）敬  
 寛遷暦の賀に、農絵の益を調、其箱に先祖より農業を勸数代相続の成功を書付たり。  
 後來其志を考へ農法怠る事なかれ。

抑農業は国家の大本なり。上ミ天子より下モ庶人に至るまで、生を養育  
 する五穀を作り出して納るものなれば、是天下の宝といふものなり。故  
 に古へ聖賢の政事にも耕作を根元とし給ふといへり。神代のむかし  
 天照大神御田作の事を執行ハせ給ひ、亦御ミつから神衣を織給ふ。  
 歌にも、いたつらに世になすさミそはたとのに神さへミそをおると聞に

も又人代の始つた本朝中興神功皇后武内之臣に勅し、土地を  
 ひらき神田を作らしめ給へり。諸越ニも天子自籍田を耕給ひ民の力  
 をかりて耕を籍田といふ、王ハ一撥、公ハ三撥、郷ハ九撥、大夫ハ二十七  
 撥、庶人ハ千畝を終とかや、周礼一撥ハ、冬田を王自耒を持一度起返させ給ふ、終  
 とハいつれも推撥の數終りて其跡を百姓請取作るなり。こと／＼く上天子より農を学  
 ひ給ひ、明堂に九室あるも井田の制を以爲之となり。

故に漢の文帝先王の法にしたかひ、みづから天下の農夫に先たちて作り  
 給へる物をもちて天地神明の祭盛(ツモ)に供給ふ。わか朝人皇十代崇神  
 天皇の十二年九月、始カムガス投ニ人民一更ニ科ニ調役(ツキエラ)一とあり。又三十  
 四代推古天皇二年春二月聖徳太子奏聞有て国々へ勅使を下され、百姓  
 に蒔仕付の時節土地相応する物并作りたて様を教させ給ふ。三十七代孝  
 徳天皇記ニ町段の數租庸調(ミツキ)のこと詔有て、四十八代称徳天  
 皇の御宇大臣吉備公勅宣を奉し、天下の百姓に大小の麦を植させられ  
 たり。されと蒔ウキうゑの時を失ひみのりよからず、爰におめて五十二代嵯  
 峨天皇の御宇弘仁十一年藤原冬嗣公勅をうけて播種(マキ)の時後れさ  
 るやうを告示させ給ふ。是より耕作の令制頻りに行ハれ、山沢原野  
(ヤマサハ)ひらけ荒亡(アレ)の地なく耕作の道盛なり。されハ諸作多き中  
 に分て麦稻の兩種は陰陽相応の草にて五穀の中の長なり。兩種の成熟を  
 考ふるに十月農功(ウノキヤ)終りて諸作取収、うゑるものあらざるに、此



月麦を蒔入事陽氣ヨウキ地中に萌モ故コなり、十一月中冬至地雷復チライフクの時一陽初イチヨウ地上に起り初る頃、麦ひとり生出、十二月地沢臨チタクリン二陽、正月地天泰チテンタイ三陽、二月雷天大壯四陽、三月沢天夫五陽、如此段々陽氣につれて成長し、四月乾ケン為カ天の時陽極て熟し、其地乾けるは陽なり、又蒔マうゆるハ男にて陽の物育モノダテやしなふに陽を以てす、麦の陽草たる事斯のことく、都て草木とも春生して秋収アキマルに、麦はかり夏四月収るによりて四月の異名を麦秋ともいへり、稲は五月中夏至天風テンフウ娠の時一陰初て来て苗を移し、六月天山遯テンサントシ二陰、七月天地否テンチヒ三陰、八月風地觀フウチクワン四陰、九月山地剝サンチハク五陰、斯のことく月毎に一陰ツム地下より上るに随つて生立、十月坤コン為キ地の時陰極りて実のる、其水田の坤なるは陰なり、とりうへるハ女にて陰の物やしなひそたつるに陰を以てす、稲の陰草たる事如斯、易エキハもろこしの帝王伏羲フウキヤン氏初て乾兌離震巽坎艮坤ケンダイリンシンカンコンジの八の卦をなし、一切萬物の理是にもるゝ事なし。今其理を以て考ふるに稲麦陰陽の物農の根本なるを以て生熟の時右のことく卦爻クハコウにかなひて有難きことなれとも、農家其所以ユエンをしらす、たゞ占法センパフのことにミ覚ミへ陰陽消長インヤウセウチウの理を明らかにし、耕作の道も此理にかなひたる事を弁へさるにより、麦稲おひたちおさまりの時を卦爻クハコウにあらハして農業の大切なる事をしらしむるなり。麦の刈カリ旬ジツ亦らむ事根本ネモトより色付て穂ホハ後に赤らむなり。是ハ陽氣上ルにしたかひムハラ根本ネモトより熟ウレるなり。稲の色付事ハ穂より赤らミ、葉ハ次に黄はミ、

藁後に熟る。是ハ八月月になれハ陰氣盛にして冷なる氣を請るにより穂より赤らむ。右陰陽の理を能々考ふへし。凡五穀其外方の野菜に至るまで天地人三才の力を得て成熟するなり。周天の数三百六十五度四分数の一にて、日輪ハ昼ハ上をめぐり夜ハ地下をめぐりて健々として無二息時一、地是にしたかひ五行の氣内にめぐりて少も不息して萬物を生育(ソビテ)するなり。然るに天地と徳を一にする人として其業を励ハダシさらんや、五穀の種をうるハ人なり、生育するハ天地の生々なり。然とも種をおろすはかりにて人耕タガヘンクサカリコサ 耘フシ 肥コ せされハ不熟するなり。天地の徳と人の力と合されハ出来ぬなり。天地の生々ハ一時も絶間なし。人不勤故に不熟多し。人ハ子の刻より寅の刻まで臥休むものなれば、何ほと働ても天地にはおよハぬなり。されは此道理を能々合点して怠りなく勤むへし。さすれハ天地の恵ミにて水損ある年も早損ある年にも、人の田よりハ我田ハよく熟して取入るなり。此理ハ農に限らず万事に心得あるへし。皆勤慎なり。

一農業全書は元禄のむかし筑前宮崎安貞翁、四十余年農民を友としてみ

つから心力を尽し手足を勞して農事をいとなミ種植の道に委しく、

又貝原篤信先生農法審なれハ、此二老人モロコシ 唐ノワンロ の農書を考へ本邦の土宜カホツ (ツチヨ) (ロンギ) にしたかひ、農功の助となるへき事を撰らみ編集して世に

著<sup>アラハ</sup>し給<sup>ハ</sup>ふ。古へより本朝の賢君<sup>ケツケン</sup>農業を尊<sup>ウツ</sup>ひ給<sup>ハ</sup>ひ、前条に述<sup>ノ</sup>ることく神代より連綿<sup>レンメン</sup>として農事盛<sup>シガ</sup>なりといへとも、農術<sup>ノウジツ</sup>を教<sup>ヲシ</sup>る書<sup>ヲシ</sup>ハ世に伝<sup>ハ</sup>らす。されは耕夫<sup>コウフ</sup>（ジヤウ）皆農法を委<sup>ヲ</sup>しくしらずして稼穡<sup>カサク</sup>（サク）の道明らかならざるゆへに、身を勞<sup>ロウ</sup>し心を苦しめて勤るといへとも、秋の實のり不足を見る事しハ／＼なりけれハ、是ヲなげく思<sup>ヲ</sup>ひ農業全書をあミて万民<sup>マンジン</sup>を恵<sup>メ</sup>ミ玉<sup>メ</sup>ふは本邦<sup>ホンポウ</sup>農書の権輿<sup>ケンヨ</sup>（ハン）万世<sup>マンゼ</sup>不朽<sup>コウ</sup>の御厚恩なり。

一 凡<sup>ヘ</sup>いにしへ聖人<sup>セイジン</sup>の政<sup>マツリコト</sup>は、専<sup>セン</sup>ら教養<sup>カウヨウ</sup>の二つに出<sup>デ</sup>す。農業の術<sup>セイヤウ</sup>ハ人を養<sup>ヲ</sup>ふ本<sup>ホ</sup>なれハ、農法<sup>ノウホウ</sup>くハしからされハ五穀<sup>ゴコク</sup>すくなくして人民<sup>セイミン</sup>生養<sup>セイヤウ</sup>をとくる事<sup>コト</sup>なし。孝弟<sup>コウテイ</sup>の道<sup>ミチ</sup>ハ人を教<sup>ヲ</sup>るの本<sup>ホ</sup>なり。人も教<sup>ヲ</sup>なけれハ人輪<sup>ジンリン</sup>明らかならずして禽獸<sup>カニシツ</sup>（トリケ）に近<sup>ニ</sup>し。故<sup>ユ</sup>に古へ<sup>コノ</sup>の聖王<sup>セイオウ</sup>賢君<sup>ケンクン</sup>天下<sup>テンカ</sup>国家<sup>コクカ</sup>を治<sup>ヲ</sup>るに必<sup>カナラズ</sup>農<sup>ノ</sup>をすゝめ稼穡<sup>カサク</sup>を教<sup>ヲ</sup>るを以て先とし、人の道<sup>ミチ</sup>を正<sup>ヲ</sup>すを以て本とし給<sup>ハ</sup>さるはなし。然るに日本の地<sup>チ</sup>ハ南北<sup>ナンボク</sup>の中央<sup>チュウオウ</sup>に当<sup>ア</sup>れるにや、陰陽<sup>インヤウ</sup>の氣<sup>キ</sup>正<sup>シク</sup>しく寒暑<sup>カンショ</sup>も中和<sup>チュウワ</sup>にかなひ、甚<sup>ハナハダ</sup>しき天災<sup>テンサイ</sup>地禍<sup>ヂカ</sup>もなく、平地<sup>ヘイチ</sup>多くして稻<sup>タウ</sup>麦<sup>マク</sup>（イネ）を種<sup>ウ</sup>るの地<sup>チ</sup>廣<sup>ク</sup>く、国土<sup>コクド</sup>勝<sup>ヒ</sup>れて肥<sup>ヒ</sup>良<sup>ヤウ</sup>なれば、万<sup>マン</sup>

(11)

：古本朝の賢君、多くハ農業を重<sup>ウツ</sup>くし給ふといへども、農術<sup>ノウジツ</sup>を教<sup>ヲ</sup>るの書<sup>ヲシ</sup>ハ世に伝<sup>ハ</sup>らず。故に農法世に委<sup>ヲ</sup>しからず。

(一七ページ)

：然るゆへに、身を勞<sup>ロウ</sup>し心を苦しめて、勤<sup>ツ</sup>めいと<sup>ト</sup>なむといへ共、効<sup>コト</sup>を得<sup>ト</sup>る事<sup>コト</sup>すくなくして、やゝもすれば、秋<sup>アキ</sup>のなりはひの不足<sup>フソク</sup>をみる<sup>コト</sup>しバ／＼なり。：唯<sup>タ</sup>ひとへに民<sup>タチ</sup>皆<sup>タチ</sup>農術<sup>ノウジツ</sup>をしらずして、稼穡<sup>カサク</sup>

（さく）の道<sup>ミチ</sup>明<sup>カ</sup>らかならざるゆへなり。

(一八ページ)

：凡<sup>ヘ</sup>いにしへ聖人<sup>セイジン</sup>の政<sup>マツリコト</sup>ハ、専<sup>セン</sup>ら教養<sup>カウヨウ</sup>の二つに出<sup>デ</sup>ず。農業の術<sup>セイヤウ</sup>ハ人を養<sup>ヲ</sup>ふの本<sup>ホ</sup>也。農術<sup>ノウジツ</sup>くハしからざれば、五穀<sup>ゴコク</sup>すくなくして、人民<sup>セイミン</sup>生養<sup>セイヤウ</sup>をとくる事<sup>コト</sup>なし。孝弟<sup>コウテイ</sup>の道<sup>ミチ</sup>ハ人を教<sup>ヲ</sup>ゆるの本<sup>ホ</sup>なり。孝弟<sup>コウテイ</sup>の教<sup>ヲ</sup>へなけれバ、人倫<sup>ジンリン</sup>明<sup>カ</sup>ならず、人の道<sup>ミチ</sup>立<sup>ツ</sup>ずして禽獸<sup>カニシツ</sup>（だもの）に近<sup>ニ</sup>し。：しかりしより以來<sup>イ</sup>代<sup>ダイ</sup>々の聖王<sup>セイオウ</sup>賢君<sup>ケンクン</sup>、天下<sup>テンカ</sup>国家<sup>コクカ</sup>を治<sup>ヲ</sup>るに、

つ種植シユンショクの類成長ルイせざるはなし。高麗コリア唐タウ土トにもかゝる上國ウツクニはなきとそ聞キへ侍る我ホ壯年の頃思オモへらく此山中にて農事を営シミ、いかに精力を尽すといへとも立身タチシハ成かたしとふと迷ひしか、四十年の頃より本心に立タかへり、よく思オモへハ、此谷筋コノヤハ至て暮しよき所也。わけて(当村トウムラハ)農人第一の肥草沢山ヒコウサキにて竹木あり、水旱の難稀ナギヒなり。冥加メイカ至極難有事と子孫に可致教示事なり。然るに今泰平の御代にしあれハ、万民安堵し親兄弟妻子相供に目出度寿をたもち、農事を励、種植の道をよく弁シへ無怠勤る時は農術世々に熟し五穀よく実のり、衣食の養ひたりて各相統ツせはをのつから貪る心もなく、風俗すなほに和順し、国富民栄へ貴賤等しく代々安楽ならん事疑あるへからず。

一此書をよみ其大概をしろといふとも、日々農事を専らに心を尽し力を

必農をすゝめ、稼穡を教るを以て先とし、人倫の道を正すを以て、本とし給タざるハなし。(一六〇―一七ページ)

抑日本の地ハ、南北の中央に当れるにや、陰陽の氣正しく、寒暑も中和にかなひ、甚しき天災地禍もなく、平原多くして、稲麦(いねむぎ)を種ふるの地ひろし。国土又勝れて肥良なれば、万づ種植の類、物として成長せざるハなし。もろこしの外にかゝる上國ハなきとぞ聞え侍る。

(一九ページ)

衣食たりて後、礼儀行ハるゝ理なれば、民種植の道をよくしりて五穀ゆたかに、衣食の養ひたりて、各其所を得バ、をのづから貪る心もなく、礼義廉恥行ハれ、風俗すなほに、人心和順し、一世安楽ならん事、日々に新に、月々にさかんなるへし。

(一九ページ)

一農家此書をよみ其大概をしろといふと

(12)

用て実に其理を執行し、修練會得せされハ無益の徒事なり 譬ハ遺教抄の発端に著述せられしごとく、書物ハよむ人の志によりて益不益異事あり、読て徳を得ざるハ其書の失にあらず、読人の心かけあしきなり。諺にも論語よミ論語しらすと云り。

此書も度々よみ記誦する人ありとも、其身にハ勤メ疎にしてよく吞込た顔付にて、より／＼の口遊一座の物かたりなどにしては更に益なし。農業の道におゐてハ幼少より真実に心かけ思ひを深くし、九夏三伏の炎天をも不厭、冬の雪吹も苦にせず、昼夜油断なく勤て農功を得る時は老て後安楽なり。都て農人ハ皆平生いとなむわさにして世なミ人なみの家業なれハ、彼放下幻術の奇妙或は軽業の綱わたり坏、熟して奇（異）の巧をなして人の目を驚す類ひよりハ、其効を得る事甚以たやすかるへし。

(13)

も、日々にいとなむ農事について、心を尽し、力を用て、実に其理を事の上<sup>（とりのお）</sup>に執行<sup>（ごなひ）</sup>し、勤めて修練會得<sup>（たんれん）</sup>せずハ、唯は無益の徒事な<sup>（とくしん）</sup>るべし。たとえバ儒書をまんで、四書小学に熟し、其余の経書にも粗通じ、字義、訓詁を諳じ、且講説ことに詳なりといへども、…却て文盲の人のごとし。此書も又是に同じ。たび／＼これを弄び手馴記誦<sup>（そらに）</sup>する人ありとも、徒に此事を以て、より／＼の口遊、一座の話談として、農業の上におゐてハ、真実に心を励ミ思ひを覃し、力を用ひてこれを心ミ營ミ、三たび臂を折の勞なくしてハ、大に驗を得る事かたかるべし。農民殊にこゝにおゐて、心をとゞめ力を尽すべし。しかハあれど、是皆平生、農家のいとなむわざにして、よの常の事なれば、彼放下幻術の雑事、これを習ふ事久して後

一 凡種芸の事にハ四季八節二十四節を考て 四季ハ春夏秋冬、八節ハ立春、春分、立夏、夏至、立秋、秋分、立冬、冬至也 其時日にをくれず、時々耕種を肝要とするなり。四季八節を用て月にハかゝるべからず。喩ハ歳内の立春なれハ其節を追ふて臘月ラツケツ（スシハ）に春の日数を積りて耕を始るなり。地の利と人の功とハよく調るといへども、天の時に合されハ苦勞重くして益すくなし。尤南北の違ひ山川の勢ひにより寒暖のかけあり有て、其所々／＼のよき時節仕覚、草木の〈芽立〉目当もある事なれハ一偏に定めかたし。されとも大抵定りたる中分の法を立て、時を見合年々の心覚してうへ蒔すへし。四時各其勤有。時節ニ格別先立てうゆれば早過て生せず、又時せつにをくれて種れハ晩くして実のりわす。物によりて時節少しの違ひにて実のり甚少き事なれハ、能々考へはかるへし。大方早きに理あり。

其事熟し、奇異の巧をなして、人の目を驚す類よりハ、其効を得る事甚以てたやすかるべし。

(二九)三〇ページ)

：凡種芸の事にハ、四季、八節、二十四節を考て 四季ハ春夏秋冬、八節ハ、立春、春分、立夏、夏至、立秋、秋分、立冬、冬至也 其時日にをくれず時分々／＼に耕し種るを肝要とするなり。四季八節を用て、月にハかゝるべからず。喩ハ歳内の立春なれハ其節を追て、臘月（すしは）に春の耕しを始るがごとし。地の利と人の功とハよく調るといへども、天の時に合されバ、苦勞空しくして益すくなし。尤南北の違ひ、山川の勢により、寒暖（さむし）のかけあり有て、其所々のよき時節ある事なれバ、一偏に定めかたし。されども大抵定りたる中分の法を立てて、其所の草木發生の時を見合せ、年々の心覚してう

(15)

へ蒔べし。四時（き）各其つとめあり。十二ヶ月をのく宜しきあり。時節に先立てうゆれば早過て生ぜず。又時節にをくれば種れば晩くして実のりうすし。物によりて、時節少の違ひにて、其実のり甚少き事なれば、能々考はかるべし。智者ありといへども、冬うへて春取る事ならざるものなり。（七九く八〇ページ）

一五穀其外草の類ハ大かた節氣に先達て生る物なるゆへ、少早きかよし。若又はからざるさハリ有て時にをくる事あらハ、よき糞しの取分陽氣のつよき物を下（ツ）に多くしきてうゆれハ、則其こやし植物の陽氣を助るゆへに早く生成し、大かたミのりよきものなり。萬の物其時分くくの氣を得て發生するゆへ、それくくの物生る時分をよくはかりて己に生せんとする時うえ、己にさかへんとする時糞（コ）し培（ツ）ひ、段々手入を用れハ、天地の生理によくかなふゆへ豊年にハ云に及ハす、少しの凶年にて万の難くせすくなく、災をのかれて秋のミのり空しきことハなきものなり。

○又五穀其外草の類ハ、大かた節氣に先立て生ずる物なるゆへ、少早まきでハよし。をそきに損多し。若又はからざるさハリ有て、やむ事を得ずして、時にをくる事あらバ、よき糞しの取分陽氣のつよき物を下（ツ）に多くしきてうゆれば、則其こやし、うへ物の陽氣を助るゆへ、早く生長し、少し時にをくられても、大かたのミのりハするものなり。（八〇ページ）

○又万の物其時分くくの氣を得て發生す

一 惣て蒔物ハ午(ルビ)の刻前宜し。蒔たる土の其日かハくをよしとす。昼より前ハ陽氣も盛んなれハなり。

一 菜(ヤサ)類稗荏子などの苗を外へ移しうゆる物ハ午(ルビ)の後よし。其ゆへハうへて後日かけ和らきて痛まず、頓て夜氣を得て夜の間にも生付ものなり。取分曇りたる日雨を待てハ猶々よし。物によりて月かしらに種る物多し。是に陰陽のみちかけ一日一時の違にて目にはさやか

るゆへ、それ／＼の物の生ずる時分をよくはかりて、巳に生ぜんとする時うへ、巳にさかへんとする時、糞し培ひ、段々次第、時によつて手入を用れば、天地の生理によくかなふゆへ、豊年にハ云に及はず、少々凶年にてても、万の難くせずなく、災をのがれて、秋のミのり空しきことハなきものなり。

(八〇〜八一ページ)

…一日の内といへども蒔物ハ午の前宜し。蒔たる土の其日かハくをよしとす。昼より前ハ陽氣もさかんなれハなり。

(八一ページ)

○又菜(やさ)などの苗を仕立をき、時至りて移しうゆる物ハ、午の後よし。其ゆへハ、うへて後日かけ和らぎて痛まず。頓て又夜氣を得て、夜の間にも生付もの

(16)



に見えねとも、皆以盛衰あること莫大なれハ、種蒔ものハ片時も早く油断せず、又刈取る物ハ少し遅くよく実のるを待得て刈とるへし。但しそは煙草粟などの類ハ少し早きもよし。年中辛勞して作り、一夜の風雨霜嵐に損毛する事計かたし、是則十分なれハこほるゝ道理を兼て心得へし。

一前条にも述ることく農人ハ常に曆を見て土用八専節かハりを考へ風雨ホの変あらんことを心にかくへし。必節の替りにハ晴天も見る中に替る事有ものなれハ、朝夕其心得手配りをよくして、彼節かわりの妨をも遁るゝ覚悟すへし。

一惣て事を前に定る工夫ハ農事に限らねとも、農人ハ取分心を用ゆへ

(17)

なり。取分雨氣曇りたる日猶よし。蒔物ハ晴日よし。又物によりて、月半(つきな  
かば)より前、月の初めに種る物多し。寔に陰陽のみちかけ、一日一時の違にて、目にハさやかに見えねども、皆以て盛衰(さかり  
おとろへ)あること、莫大なれバ、種蒔物ハ片時も早く由断せず、又刈取る物ハ、少し遅くよく実のるを待得て刈とるべし。但物によりて、大風霖雨の見合、是又肝要也。  
(八一〜八二ページ)

○又農人ハつねに曆を見て、土用八専、其外節氣のかハりを考へ、風雨等の変あらんことを心にかくべし。必氣のかハりには、晴天も見る中にかハる物なれば、朝夕つとめの品手くバりを、圃の中にてよくおもんばかり、彼節がハりの妨をものがるゝ覚悟兼てすべし。  
(八二ページ)

○抑事を前に定る工夫ハ、農事に限ら

し。天氣の考へを疎にしぬれハ一時の風雨に数月の苦勞を空しくすること間多し。必油断すへからず。物ごと進ハ陽なり、後ハ陰なり。農業も軍(い)事にかハることなし。すまされハ勝利少なし。日月の草木国土を照し給ひ、瞬する間も滯たゆミなき理りを目当として寸陰も怠るへからず、殊に耕作種芸の事ハ直に天道の福をいのる事なれハ、心ゆるみ怠りて朝も日にをくれて起、大切至極の光陰を弁へす、今日の又なき遺教抄に古人一日を過す事千金より重しと事をハうち忘れて農業を油断がちに勤めぬれハ、譬ハ一日に一時つゝ不足しても一年にハ三百六拾時也、合て見れハ六十日の違になる、三ヶ年如斯怠れハ半年の働不足と成る也。又是を一時つゝ働で勤る時ハ三ヶ年にハ一ヶ年の余慶と成、如此出精すれハ家富榮へ子孫相統疑なし。是を年々積れハ困窮の基ひ、天道の恵にもれ、いつとなく田畠も瘠(やせ)あれ終には先祖より代々心勞して來たる家督を失ひ家内眷屬ちり／＼になる類ひ世間に多し。然ハ心あらん農民ハ必後のうれへを思ひて、天の時に随ひ一寸の光陰をも大切におしめて農業を大切に勤怠る事なかれ。

ねども、農人ハ取分心を用ゆべし。天氣の考へを疎かにしぬれば、一時の風雨(あめ)により、数月の苦勞を忽に空しくすること間多し。かならず由断すべからず。物ごと進は陽なり。後ハ陰なり。農業も軍事(い)にかハることなし。すまされハ勝利(か)少し。日月の天にめぐりて、瞬する間も滯たゆミなき理りを目当として、寸陰も怠るべからず。殊に耕作種芸(うえ)の事ハ、直に天道の福を專いのる事なれバ、怠懶して、朝も日にをくれて起、大切至極なる光陰をわきまへず、今日の日の又なき理りをバうちわすれて、偏に怠りがちに、不淨なる氣立にて、農業をいとなめバ、其心違へるを以て、天道のめぐミにもれ、いつとなく、田畠も瘠あれ、年をへ、月をかさね、災いやまし、飢寒(うへ)のうれへにせまり、後々ハ父子夫婦もはなれ、／＼になり、終に人づかれハれの身とおちぶ

れ、貧苦のかなしみやむ時なし。然れバ心あらん農民ハ、必後のうれへを思ひて、あらかじめ、ふせぐべし。天の時にしたがひ、一寸の光陰(いと)をも大切に おしみて、農業に身を投ち、心を用ること慎でおこたる事なかれ。

(八二〜八四ページ)

一耕作ハ天地の恵にてそたつものゆへ年中陰陽の考第一なり。夫陰陽の理りハ至て深しといへとも、耕作に用る所ハ其心を付ぬれハさとり安し。農人これを知らずんハあるへからず。其利をよく弁へて耕作を勤れハ利潤多し。先昼ハ陽、夜ハ陰なり。火ハ陽、水ハ陰、土の乾たるハ陽、しめりたるハ陰、ねはりかたまりたるも陰、脆もろくさハやかなるハ陽、かるくして柔ヤハツカ過ぎたる浮泥ふでいハ陰(つち)なり。重く強くはたくるハ陽なり。此ホの類を考へ土地の心を知るへし。仮初にも陰気の陽気に勝ざるやうニ分別して陽と陰と順によく調ふ計を専とすへし。此段陰気の陽気に勝ざるやうに分別せよとあり。譬ハ天地の陰陽不順なれハ世中に殃ウザハひあり、人の陰陽不順なれハ身に病あり、又朝寝して遅く起れハ其身の陰気かちて陽気をふさくゆへ、年月を積り忽病ひ生し、家業忘ると家を滅ホトすなり。又

…夫陰陽の理りハ至て深しといへども、耕作に用ゆる所ハ、其心を付ぬればさとりやすし。農人これをしらずハあるべからず。其理りをわきまへずして耕作をつとむるハ、多くの苦勞をなすといへども、利潤を得る事少なし。先土のしめりたるハ陰なり。乾きたるハ陽なり。ねばかりかたまりたるハ陰なり。脆く、さやかなるハ陽なり。かるくして柔か過たる浮泥(つち)ハ陰なり。重く強くはらゝぐ類は陽なり。此等の類ををしはか

男に差図する女と女の差図を請ル男ハ陰陽逆するゆへに終にハ家<sup>ホト</sup>を滅す事古今其ためし少ナからず。孔子も女子と小人とハやしなひかたしとの給ふ。○耕作にハ多くの心得あり。先我身の分限をよくハはかりて田畠を作るへし。各其分際より内バなるをよしとす。其分に過るを甚あしとす。このゆへに家内の人数を計りて田畠を少しうちハに作るへし。さすれば心のまゝに耕しくさざるゆへに、能実のりて取おさめよきものなり。又分外に多く作るときハ手廻し成かねあぐみ仕事手後レ思ひの外取収て物成あしきものなり。第一家内の働による事なれハ、家族ハ云ふに及す下男女迄情をかけ賞罪を正し、仕事の出来よき時ハ誉、又出来のあしき日も呵<sup>しか</sup>らず、扱てにハ仕事のでき少しよろしからねとも、か様の時ハ何ンそ差支心遣ひなとあり、却て皆々精力を尽し嘸草臥つらんとなぐり置可申。此段かくへつ仕方あしく心得かたき事もあらば、其日の人数書留置、人の善惡を考へ、其中にて実意成ものを改、追て内々間糺ときハ善惡虚実分明に知る事もあり、其上にて人の遣ひやうあり。然共主人たるものハ日々夜々心を付作場へ趣、召使の者へ下知を成すへし。内に斗り居てハ仕事の進退しれるものにあらず、代々下人と共ニ農事を勤可申肝要なり。是天理にも叶ふて順なり。万事順成則ハ福有、逆成則ハ禍有と思ふへし。又折々ハ下男女にも魚肉などあたへ浮世の物語などして興し、扱其方共も只今手前か仕事を出精してくれるとハいふものゝ、給銀賃錢を取からハ則我身の仕事をすると心得、

りて、土地の心をしるべし。仮初にも陰氣の陽氣に勝ざるやうに分別し、陰陽のよく調る計を專とすべし。

(四八〜四九ページ)

：抑耕作にハ多くの心得あり、先農人たるものハ、我身上の分限をよくはかりて田畠を作るべし。各其分際より内バなるを以てよしとし、其分に過るを以て甚あしとす。

(四七〜四八ページ)

：多少(おほきもすくなくも)下人をつかふものハ、心をねんごろに用ひて、仁愛を專とし、正直信実を本とし、善惡をわかち、賞罰を正しくして、己を和悦(やほらぎ)に心よくして人をつかへバ、下人も又、心いさミ苦勞をわすれてつとむるゆへ、其仕事のはかゆくのみならず、五穀等の生成も自ら滞らず、よく長じよく実のものなり。

(四九〜五〇ページ)

常々正直信実は無間断勤れハ必天の御恵ありて後々福ひ来るといふ事を念頭に教れハ、皆いさミテ辛勞をもちらへ、かけおもてなく働くゆへ仕事のはかゆきおのつと五穀よく成長するやうに成もの也。遺教抄第二巻に一年の計ハ春耕にあり、春耕されハ秋の功なし、一日の計ハ鶏鳴にあり、是を能々考へ明日の業ハ前夜より工夫を定め曉方起て天氣の晴雨をよく見定手配すへし。前条に述ることく一日に一時つゝといへとも増と減との違にてハ莫太の損益なれハ、一日に一時つゝ働出す事を家風とすれハ、塵積りて山となる理合て天地の道に合ふゆへに、これに過ぎたる祈禱もなく、諺にかせくに追付貪乏なしといふことく、をのつから耕作よく実のり其年の暮豊にして又來ル年も如斯、仕馴仕來家法と成、次第に家栄へ子孫長久なるへし。然則ハ先祖へ孝となり子孫へハ慈愛と成、其身も安樂にて年寄ルほと富貴になり、家督ハ子に譲り樂隱居のたのしみ此うへあるへからず。

一 百姓ハ農具を撰らみて遣ふへし。農人精力を尽すといへとも農具あしけれハ仕事のしるしなきものなり。少しの費をいとハすかねたとよきを調へ用ゆれハ、思の外仕事のはかゆきて益多し。鎌ハ猶以よきをつかふへし。其鎌一年稲麦を刈て翌年山草をかるやうに年々心掛てよし。

(21)

又古語にもいへることく、一年の計ハ春の耕にあり、一日の計は鶏鳴（よるのハツ）にある事なれば、未明より起て早朝陽氣につれて、田島に出て動くべし。又明る日の仕事を則前夜より考へ定めおき、曉方おきて天氣の晴雨をよく見ハかりて、猶其日の手くバりを定むべし。

(五〇ページ)

○惣じて農具をゑらび、それ／＼の土地に随て宜きを用ゆべし。(六七ページ)  
 ; 農具の類あしけれバ、農人精力を尽すといへども、仕事のしるしハなき物なり。必少のついでをいとハずして、かね

一 農業ハ牛（悪症の牛又は高値の牛求へからず、中くらいよし）のよしあしにて益不益有、又牛の飼やう甚大事なり。其家主たるもの大家小家共牛を大切にすへし。下人まかせにすへからず。先此辺にてハ山野の草ハ申及す、年中の糠類、藁、大小豆のから、稗粟のから切こしらへ、ぬかの交りけん縄手草ハ（牛の喰ぬ草類也）あしき草を除けて干、又麦刈の時を考へ、扱水の飼やう朝夕四季のかけん有夏土用中ハ昼水吞てよし 白水棚下の洗水ホ猶以て冬春の飼料別て大事なり。春の牛やせたる家ハ必身上あしきもの也。牛ハ其家の妻女たる者飼やう心掛へし、男たるものハ外トへ出るものゆへ行届ぬ事あり。

一 田島ハ年々に土地をやすめて作るをよしとす。然共地余慶なくてハかゆる事ならずハ、植ものをかへて作るへし。毎年一種を作るへからす。所により水田など一年休め又ハ島となし作れハ土の氣転じてさかんになり、虫氣もなく実のり一倍もある物とかや。此辺にて田はこ地の跡稲のよく出来る理りなるへし。凡土ハ転しかゆれハ陽氣多く、執滞すれハ陰氣おほしと心得へし。晴たる日に耕し其土白く干たる時か

よき農具を用意し、思ひのまゝにはたらくべし。  
(五一ページ)

：又田島ハ年々にかへ、地をやすめて作るをよしとす。しかれども地の余計なくて、かゆる事ならざるハ、うゑ物をかへて作るへし。所により水田を一、二年も島となし作れば、土の氣、転じてさかんになり、草生ぜず虫氣もなく、実のり

きくたきてよし、耕しうゆる事ごとくに陰陽を調て天地の徳をたすくへし。

一 種子ものハ五穀に限らず種をゑらふ事肝要也。是生物（しやうぶつ）の根源（げん）則生理其中にある事なれハ慎て大切にすへき事也。作物過もせずよき程に出来て虫氣の痛もなく、色よくうるハしきを常のかりしほより猶よく熟して刈取稻ハ雌穂を見わけてゑりとるへし。左の図を見つて考ふへし。

古今原ノ始ニ云ク、炎帝神農氏始メテ擇ヒニ五穀ノ種ヲ一教テレ民ニ作テニ耒耜（ライシ）  
 （ハスキ）ヲ一以耕稼セシム、此レ力レ農ヲ之始メナリ云々。又日本書紀神代ノ  
 卷ニ云ク天照大神 喜レ之ヲ曰ク、是物ノ者則チ顯見蒼生ノ可モノトニ食而活  
 二之也。乃（ハ）以（ハ）二粟稗麥豆一、為（シ）二陸田種子ト一、以（レ）稻ヲ為（ス）二水田種子ト  
 一。又因定二天邑（ハ）君ヲ一（今地頭庄屋類也）。即チ以テ二稻種ヲ一始メテ  
 植（フ）二天狹田及ヒ長田ニ一、其ノ秋ノ垂穎八握莫々然モ甚タ快也トアリ。

(23)

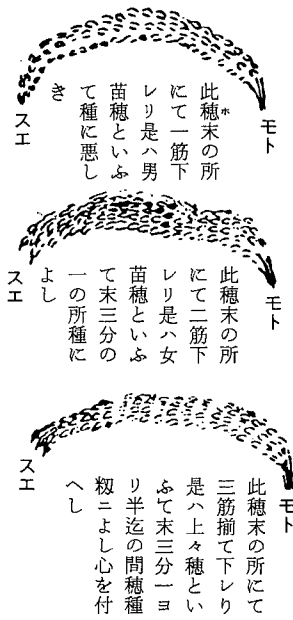
一倍もある物なり。（四八ページ）  
 ；凡土ハ転じかゆれバ陽氣多く、又執滯  
 すれば陰氣おほし。（四八ページ）  
 ；晴たる日に耕し、其土白く干たる時か  
 きくたき、。農人よく此理りを弁へ、  
 凡耕しうゆる事ごとくに、皆陰陽を調て、  
 天地の徳をたすくべし。（四九ページ）

五穀にかぎらず、万づの物、たねをゑらぶ事肝要なり。是生物（しやうぶつ）の根源（げん）にて、則生理（のこゝろ）其中にある事なれば、慎て大切にすべきことなり。作り物の過もせず、よき程に出来て、虫氣の痛もなく、色よくうるハしきを、常のかりしほより猶よく熟して刈取、雌穂を見分てゑりとるべし。

（六九ページ）

右に述ルごとく稻種を取ニハ、中分のよく実入うるハしきを見立、其田ヲいく度も改、交りいね、枯穂、ひへ、(男苗穂)などを悉取り、其後よく熟して刈、別に干てこぎ、毛いねならばそろく打よくひさびヲして俵に入置べし。種粃を強くうつへからす。

種粃撰方図



右ハ苗代種粃の多らみ方により取実多少あり、此事越中国新川郡何某試しに、藁一束に凡粃五合程つゝ余分あり。されハ田沓反ニ付益米沓斗五升と見へる。一國にてハ莫太の益なり。扱亦同国蛸波郡何某種粃を多らみし時、穂の目方を試しに、女苗穂ハ男苗穂より二十穂にて凡八匁程つゝ余計有事なりとぞ、斯のごとく



益あるに違なきよし。加州金沢松村氏より聞けり。因て農家へ是を伝ふ。文化十  
四丁丑年四月 濃州大垣深造舎トアリ

右ハ文政四辛巳正月勝山松毬庵予か耕作を大切に心掛ル事を察して写し送給ふ。

是則天のあたへと感入、同年の秋より少しつゝ女苗穂をゑらミけるに弥取実よ  
し。又文政七酉年正月伯州大庄屋足羽氏より板行にして方々へ配ラレケルヲ白髪  
國藏持帰り引合候所右同文言なり。依て種積帳ニモ書入置也。誠に忘不へから  
す。

一粟稗の類ハ其畠にて穂ふとく色よきをぬき穂にしてつり置へし。

…又粟黍などの類ハ、其畠にてよく秀て  
色よきをゑらび、ぬき穂にしてつり置へ  
し。(六九ページ)

一大小豆の類ハ粒揃ひて色つやよきを種とすへし。

一物種を置所ハ土蔵をよしとす。されとも湿氣にふれざる心得すへし。

…物だねをおさめ置所ハ、土蔵をよしと  
す。されとも湿氣にふれざる心得すべ  
し。(六九〜七〇ページ)

一惣て物だねハよく吟味して少し損したるをもうゆへからす。いた

○又物だねをゑらぶ事、…能吟味して、

ミたる種ハ一旦生しきかへるやうなれとも、終にハかしくてかれるものなり。

一 糲<sup>も</sup>りたるたねをうゆへからず。春<sup>はる</sup>て多く減<sup>へ</sup>てもしらげになりかたし。飯<sup>い</sup>に炊<sup>た</sup>てハむらにへして味<sup>あじ</sup>まであしし。一切種のゑらひあしけれハ色々の損多し。疎<sup>す</sup>にすへからず。惣<sup>そう</sup>て物種ハ能く干して置へし。

一 いねに赤米其外色のあしき米の糲<sup>も</sup>るなとハ其たねのゑらみあしきゆへなり。少の手間にて過分の徳用となることなれハ、作人たるものよくく心得種を撰へし。

少も損したるをハ必うゆるべからず。少にても痛たるたねハ、一旦生じ榮るやうなれども、終にかじけて死る物なり。

(七〇ページ)

…尤糲<sup>も</sup>りたるたねをうゆべからず。春て多く減<sup>へ</sup>てもしらげになりがたし。糲<sup>も</sup>にハマじりありて、見つきあしく、飯に炊てはむらにゑして、味までよからず。物ごとたねのゑらひあしけれバ、色々の損多し。懇<sup>こん</sup>にゑらぶべし。(七〇ページ)

○又五穀の種をよく干あげ、…虫の付事なきものなり。(七〇〜七一ページ)

○又稻に赤米其外色のあしき米の糲<sup>も</sup>るなどハ、多くハ、其たねをゑらぶ事委しからざるゆへなり。少しの手間にて過分の違となる事なれバ、作人たるものつゝしみてゑらぶへき事也。(七十二ページ)

一耕作ハ一種(ナシ)物を作りてハあしきものなりと老人の咄を聞伝ふ。よく作りあたれハ大利を得るといへとも、年により天氣の不順にて其一品の作あしき時ハ迷惑に及ぶものなり。只数々作れハあしき作ありても、又よきものあり。大切に心得へし。此段兼て聞覚たる事なれとも時々流行の稲有り、其種を専らに作れハ、苗代田うへ刈揚ホの勝手よきものゆへ一種の稲を多く作るもの也。然に今年文政八四年夏土用中迄ハ一統豊年ならんと悦ぶ處、土用明の頃より北風十日斗吹、俄に冷氣強く、其風にあふたる稲不熟多し。或ハ竹藪家陰谷のそむけによりて風をよけたる所ハ実入よし。さあれハ農民たるもの常々此心得あるへし。右悪風にて忽天地の陰陽不順になり作りて不熟と成りしハ天災なり。恐るへし〜。

一春の耕ハ冬至より五十五日にあたる頃菖蒲の初て芽たつを見て 菖蒲ハ百草に先立て生るものなるよし 耕し始るものと古書に見へたり。されと此山中ハ大雪余寒氣強く草木の芽立も遅けれハ、往古より仕来り言伝又曆を見て考へ可申事なり。一村の内にては陰陽の遅速あり。当村にては白髪と中原雪の降やう消時も異なり、されハ雪解に随ひ陽氣の催しを見合耕すへし。

(27)

○又前漢書に記しをけるハ、穀を種ることハ一色を多くハ作るべからずと。いかんとなれば五穀を始め、色々雑穀数多く作れば、たとひ凶年にては、其中に必利を得物もある事なれば、皆損するまでの愁ハなし。若一種を多く作りて、相応する年ハ大利を得る事もあれど、それハ稀にして、災害(ハひ)にあふ事ハ多し。農人必色々を作るべしと見えたり。

(一一二ページ)

○さて春の耕しハ、冬至(十一月)より五十五日に当る時分、菖蒲の初てめだつを見て耕し始る物なり。菖蒲ハ百草に先立て生ずる物なれば、是を目当とする事也。：すべて田島共に一村の内にしては、所により陽氣の遅速(おそく)ある事なれば、寒氣の早くしりぞく所より、段々に耕す心得すべし。(五一ページ)

一春の耕ハ犁すいてそのまゝ 耙むまくにてかくへし。春ハ風おほきゆへすきて久しく置ハ、土かわき過うつけて土性ぬくるもの也。

一犁つちくて間を置日数をふれハ雨にあひて 塊つちくの性ぬけ陰氣そこにとをして甚あしき事なり。

一犁りい一擺いちばい六と云事あり。是ハ一度犁すまてハ六度かきこなせといふ事なり。犁事ハいかにも平らかにむらなくかく事ハ数度かきてよし。かきこなす事 懇ねんこにして 塊つちくなからんかためなり。細かによくかきたる地ハうるほひよく水をたもつゆへ少々ひての早ひてにもかハかすして苗ひいたます。とかく土細かにして和らかされハ作り物の利潤少しと心得へし。殊に苗の根のあしき土には思ひあハす、土あらけれハ糞もむら交りなるゆへなり。

：又春の耕しハ手に尋で勞すとて、犁てそのまゝ耙にてかくべし。いかんとなれば、春ハ風おほきゆへ、すきてかゝずそのまゝをけバ土かわき過うつけて、性ぬくるものなり。(五一〜五二ページ)

：犁て間ををき、日数をふれば、雨にあひて、塊の性ぬけ、陰氣そこにとをりて、甚きらふ事なり。耕さざるにハおとれり。(五二ページ)

○又犁(ク)一、擺(カ)六と云事あり。是ハ一度犁てハ六度かきこなせと云ふ事なり。(五八ページ)

：又犁ことハいかにも平らかにむらなく、かく事ハ二三べんもいか程もくハしきをよしとする事也。是かきこなす事の懇にして、塊なからんがためなり。細かによくかきたる地ハ、うるほいをよくた

一耕しハ肥土斗りを平かにすへし。若深くして底の生土をうこかせハ、毒氣上にあかりて却て作物のそたちあしく、殊更植付前のすぎやう深くして生土うこけハ苗生土の毒氣にあたりてさかへかたし。又苗の立根か底の細土と思ひ合されハミのりよからぬものなり。惣て穀子(こく)ハ立根より生ると心得へし。然るゆへに根の下に塊もなく、又にか土もなきやうにこしらへ、糞も根の下に能行わたる心得すへし。

もつゆへ、少々の早にもかハかずして、苗いたまず。とかく土細かにして和らざれば、作り物の利潤少しとするべし。苗の根、あらし土にハ思ひあはず、糞もむら交りあるゆへなり。

(五二〜五三ページ)

：重てすぐ事ふかくして、生土をうこかせバ、毒氣上にあがりて、却てうへ物いたむものなり。：たね生土の毒氣にあたりて、生じがたく、さかへがたし。

(五三ページ)

：苗の立根が底の細土と思ひ合されバ、ミのりよからぬものなり。物ごと穀子ハ立根より生ずると心得べし。然故に根の下に塊もなく、又にか土もなきやうにこしらへ、糞も根の下に能行わたる心得すべし。

(五八〜五九ページ)

一土の性によりしげくかくへからざるも間にハあるへし。細砂こますなの弱よくや  
 へらかなる地、灰のごとく力なくかるき土などは、さのミしげくかく  
 へからず。これらの土ハ少々塊ありとも性をもたせ置力とする也。一  
 偏へんにハ思ふへからず、所により時によりて機転かてんを用ゆへし。

一田ハ秋耕も宜し。秋稻を刈おはりて一日も早く犁たて、よこ何へんも  
 かき置、白く干たる時又二三へんかき、雪霜にあハせ置て、来春地の  
 氣和する時日高を待て又すぎかきしてよし。秋耕の地ハ草もすくなく  
 春の手廻しよくミのりもよしといへり。

：但又土の性により、しげくかくべから  
 ざるも、間にハあるべし。細沙の地、弱  
 やへらかなる地、灰のごとくちからなく  
 かるき土などハ、さのミしげくかくへ  
 からず。此等の土ハ少々塊ありとも、性  
 をもたせをき、力とする事也。一偏にハ  
 思ふべからず。所により、時によりて、  
 機転を用ゆべし。 (五九ページ)

○又耕す事ハ麦を蒔地の外も大かた秋耕  
 (あき)に宜し。秋稻を刈おはりて、一日  
 も早く犁、たてよこ何へんもかきをき、  
 白く干たる時、又かく事二三遍し、雪霜  
 にあハせ置て、来春地の氣和する時、日  
 高を待て又すぎ、かきこなす事、三四へ  
 んすれべ、其地さハやかに、…。秋耕  
 (あき)の地ハ、草もをのづからすくなく、  
 中うち芸にさのミちから入らず、万づ  
 徳分多し。 (五九ページ)

一夏至(五月)ハ天氣始て暑し。されとも陰氣ハ此時始てきさす。此時も又土とくるものなり。又夏至の後九十日昼夜ひとし、此時も又天氣和す。凡此(これら)の時を以て田畠を耕せハ甚よしといへり。此辺にてハ夏至の後耕事ハ大豆もおそきくらい、小豆麥あわそは時畠となり。心得へし。

一田の角(す)をうつ事深く打て其土をさらへ出し置へし。左なくてハ荒擺(あらかま)の時(むす)紀(へ)すみくへゆかぬものにて、あら土残てあし。

一畦のぬりやう大事。稻ハ水にてそたつものゆへ少し水洩(も)たる所ハ稻の出来あしく突入わろし。あせハ土を随分丈夫につけて水のもらぬやうにすへし。惣て畦ハ上へくとあがるものゆへ、其心得にて春はしめて畦をけつる時上エの平ラ斗りけつり、下タ平ハ其佩捨置、ひよせあせといふてぬる時心を付穴なとよくくふさき、中犁の時畦の下タ平をよくくけつり、草のなきやふにして置ハ、本畦をぬる時勝手よし。本あせをぬる時人々一遍つゝなてるもの也。予ハ二へんつゝなてゝ試ルに水持

(31)

○又夏至(五月)ハ天氣始て暑し。されども陰氣ハ此時始てきさす。此時も又土とくるものなり。又夏至の後九十日、昼夜(よる)ひとし。此時も又天氣和す。凡此等の時を以て、田畠を耕せバ、一度にして五度にも当るものなり。これを名付けて膏沢と云て、土のうるほひ和らぐ時なり。皆これ耕してすぐれてよき時なり。

(五四ページ)

もよし。猶むくろがへしあとなどに心を付てよくくさらへ、山あせもほそくならぬやう年々丈夫にぬるへし。あとしば打やう窪<sup>くぼ</sup>数をかそへあと見合長サ菅尺七八寸二尺くらい、巾六寸七寸可持見合あり。

一苗代の事一大事なり。右にも述ることく種ものハ生物の根元、秋の実のりの元なれハ、大切にこしらへて蒔へし。予壮年より心を付るに、苗のあしきハ稲出来後レ実のりまで違ふもの也。苗代ハ犁擺入念随分<sup>い</sup>地を平かにして、種子ハ少しへうすく蒔へし。尤不熟の年ハ籾の取やう念を入れても生立悪敷ものゆへ、種子も少し余分取置平生よりあつく蒔へし。苗代地よくくこしらへ、種子を蒔へき所ハ手にて悉く押へ、草もこへも稲かぶも皆々底ニ入、こへ土斗うへに上り、いかにも村なくこしらへて水を澄し、少も障りのなくして蒔へし。扱又苗代地に（土わきあがりて  
苗生付わろし）冬こへハあしく夏こへの細かなるを春入て耕へし。又蒔時のこへハ当家代々の仕来ハ冬こへの細かなるにすくもを交<sup>ま</sup>せ合、濃糞（のうふん  
こき）をかけ置、春に成苗代以前十余日にして、右のこへを打碎、又よきこへをかけ置 此こへの廻りにハ夏こへわらこへをつみて、其中によくくませて置也 苗代地に入来りぬれとも、隣家などハ春に成て右のことくこへを拵苗代に用るに敢て替る事なしと承り、文政八乙酉年ハ春に成て件の通り糞<sup>こへ</sup>をこしらへ苗代に用るなり。



予苗代を大切に思ひいろ／＼工夫して先麦を干田に蒔、翌年田はこ作にして其次の年苗代にせしか、苗の生立甚よし。如此年々替地にして苗を作りけれハ、麦ハ夫食となり醬油にもよし、煙草ハ相応の価となり益筋多し。只秋の麦まき人歩（余分）いれとも苗の出来よく稲の育早く実入よし。

一苗代水引やう、はしめハ随分浅く苗の延るに随ひ少しつゝ深くすへし。尤種子を蒔て五七日の頃晴天見合水を干てよし。斯のことく二日も干せハ早く芽ふきてそたつもの也。又常に天氣のよき日ハ小畦のはしをせき溜水ニすれハ水温りて時刻の移るに随ひ水へりて、苗の葉ちら／＼水上に出れハ、思の外苗よく延るもの也。申の時頃せきをはつし置ハ夜分迄に水湛るなり。毎日心を付誠に赤子を育るやうにすへし。惣て植付後水の見やう至て大事也。晴雨の時夕立昼夜のかけんて述ルにいとまなし。口傳。

一苗代こへに青芽とて柳の芽立を短く刈て入ル事あり。されとも此辺にてハ芽立遅く、何ほとも芽吹不申、四五日前にかりて束ひ、日向の水につけてよしといへり。是ハ、年々柳の芽たち早きを求植置 挿木よし可申事也。東伯大鳥居辺を見るに田地のはし／＼に株柳多し、彼地ハ芽たち早く苗代こへに甚よしと承る。予思らく、此辺早稲刈揚の田に一時も

早く菜たねを蒔そたて置、折々こゑを仕込翌年苗代こへにいたし度存ながら、何となく延引せり。当年文政九の秋より作り初用て試可申。右のこへをして心して聞。

一 田畠を仕付て後草を去て其根を絶へし。稂莠とて苗によく似たる草あり。此草ハ苗にさき立てしげりさかへて土地の氣を奪ひ竊むゆへ苗を妨るなり。ゆたんなく取去へし。喩ハ草ハ主人(ある)のごとし。もとより其所に有り来るもの也。又苗ハ客人の如し。わきよりの入人なれハ、大ていの力を入れてハ(草ヲ)除き去かたし。悪きものゝ栄へやすぎハ世上の常の事なれハ、草のさかえて五こくホを害するハ甚速か也。此ゆへに上の農人ハ草のいまだ目に見へぬうちに芸ざり中うちし中の農人ハ草見へて後芸ルなり。見へて後も芸らざるを下の農人といふ。是ハ土地の咎人(とが)といふものにて子孫の相続竟束なし。(故)勤へし慎むへし。

すでに、種子を蒔、苗をうへて後、農人のつとめハ、田畠の草をさりて、其根を絶べし。稂莠とて苗によく似たる草あり。此草ハ苗に先立てしげりさかへ、暫時(しばらく)もさらざれば程なくはびこりて、土地の氣をうばひ竊むゆへ、苗を妨る事がぎりなし。由断なく取去べし。喩ハ草ハ主人(ある)のごとし。もとより其所に有来ものなり。苗ハ客人のごとく、わきよりの入人なれば、大かたの力を用てハ悉のぞきさがたし。其上よき物ハ生立がたく、悪き物の栄へやすぎハ、世上よのつねの事なれば、草のさかへて五穀等を害するハ甚速かなる物なり。此ゆへに、上の農人ハ、草のいまだ目に見えざるに中うちし芸り、中の農人ハ見えて後芸る也。見えて後も芸らざるを下の農

一畠物ハ苗生して馬耳（むまの）のことくなる時中打するともいへり。苗一二寸土を生出たる時畦中の高下土むら有をハかきならし、芸りぬきたる草を田なれハ苗の下ニ踏こめハ直にこへとなる。畠なれハうねの高き所に攤（ひら）けをき、かれて後うへ物の根のきハによせ置て土をおほひ、又其上よりもこへをかくれは、枯れたる草腐りつふれて土よく肥るもの也。是を籽（くまおほひ）と云なり。古より耘籽（うんじ）ハくさざり草おほふとて、苗の根にかれたる草などおほひをく事也。

一作物の中うちをあらくうつ事あしく、只草の根を懇（ねんこう）にうちさりて作りの根にあたへるへからず。又春の中うちハ地を起し度ハ草を削殺（けつころ）しからずと心得へし。

人とす。是土地の咎人なり。

(35)

(八四〜八五ページ)

○又畠物ハ苗生じて、馬耳（むまの）のことくなる時中うちするともいふなり。苗一二寸土を生出たる時、畦中の高下、土むら有をバ、かきならし芸り、ぬきたる草を、田なれバ苗の根の下に踏こみ、畠ならバ畦の高き所に攤（ひら）けをき、かれて後うへ物の根のきハによせ置て土をおほひ、又其上よりも、糞をかくれれば、枯れたる草腐りつふれて、土よく肥るものなり。是を籽と云なり。古より耘籽ハ、くさざり、草おほふとて、苗の根に枯れたる草かやをおほひをく事なり。

(八五〜八六ページ)

○又五穀其外の中うちすること、…懇（ねんこう）にうつことなり。…尤物により、時にハよる事なれども、強くあらく中うちする事

一中うちハはしめさらくと軽くうち、二遍めハ深く、三遍めハ浅きかよし。いかんとなれハ初一遍ハ草のめたよんとするを削殺し、二遍めの深きハうへ物のまだ立根斗りにてわき根のさかへぬ間に底の塊をもうちくたき、根底の氣よくめくるためなり。三遍めの時ハ早わき根はびこるゆへ深く強くうてハ作物いたむ事あり。中打する度毎に干たる細土の底に入て、うへ物の細根是に思ひ合てさかへはひこる心得肝要なり。

ハよからぬ事なり。只草の根を懇にうちきりて、苗の根にあらくあたるべからず。  
(八六ページ)

○又曰春の中うちハ地を起し、夏ハ草を削殺し、からすと心得へし。

(八六〜八七ページ)

○又中うちハ始の第一遍ハ深きを好まず。さらくとかるうち、二遍めハ深くすべし。三遍めよりハ次第に浅きがよし。いかんとなれハ初一遍ハ草のめだたんとするを削殺し、二遍めの深くうち事ハ、うへ物いまだ、立根ばかりにて、わき根ハさかへぬ間に、底の塊をもうちくたき、根底の氣、よくめぐるためなるべし。三遍の時ハ、早わき根やうやくはびこるゆへ、深く強くうてバ、苗いたむ事あり。然故に如此せんくと浅くうち事也。いかさま中うちする度ごとに、干

一穀子こくしハ立根の精より生るものなれハ、実入を求る類の物ハ立根のさきをよくやしなふへし。糞も立根のさきに能く行わたる心得肝要也。又田を芸時に 田の草取ノ事 草なくとも浮根浮葉をハとりさるへし。是に精をぬかすまじき為也。又中打ハしめりたる時うたぬやうにすへし。日と風とにあひて土白く干たる時一遍うてハしめりて黒き時四五遍もうちたるに勝るもの也。又細土を作物の根によく／＼ならし置ハよく栄へ、早にも痛す根くはりよくして、風雨にもたをれず実のりもよし。

たる細土の底に入て、うへ物の細根是に思ひ合てさかへはびこる心得する事、肝要なり。  
(八七〜八八ページ)

○：穀子ハ立根の精より生ずる物なれば、実のりを求る類の物ハ、立根のさきをよくやしなふべし。：糞も、立根のさきによく行わたる心得すべし。又田を芸る時に草なくとも、浮根浮葉(うきたるねはきハ)をバとりさるべし。是に精をぬかすまじきためなり。  
(八九ページ)

○又中うちハ、しめりたる時、必うつべからず。日と風とにあひて、土白く干たる時一遍うちたるハ、しめりて黒き時、四五遍もうちたるに勝るものなり。：其ゆへ中うちをさい／＼すれば、上の日にあたりたる細土底に入、うへ物の根に陽氣を加へ、扱上なるかへきたる、細土を以てせん／＼に根によせおほひ、うるほひに合せぬれば、うへ物さかゆる事甚

一芸事心あしくてハ悪し。心を静に一しほくハしく懇にすへし。是も土地により植物それ／＼の見合あるへし。

一田畠（りやうばく、あし）に良薄（よし）あり、土に肥磽（ひがせ）あり。薄くやせたる地に糞を用るハ農事第一の事也。薄田を變して良田となし瘠地を肥地となす事、これ糞のちからやしなひにあらされハあたハす。故に糞壤（ふんじやう）（こへち）を集め貯る事を專にすへし。糞養をよく用ひ地力を助て作物に念を入されハ、いかんそ秋の實のりあらんや。此辺にてハ草こへを專らとする事なり。是も五六月盆迄の草を第一刈込事肝要也。秋に成てハ草の精ぬけてこへにあし。惣て谷々の草よし。峰峠（への草）姫笹（ひめささ）杯ハわろし。夏草を刈取る事ハ自力又下人の働牛の善悪によれり。然共近来ハ下男に草刈の上手も稀なり。此段草刈の下手なる者ハ草もあしく

し。且又、根の土厚ければ、早にも痛  
ず、風雨にもたをれず、…

（八九〜九〇ページ）

…すべて、万の中うち、芸る事、心あらくてハなりがたし。心をとどめで、一しほくハしく懇にすべし。但是も又土地によりうへ物により、それ／＼のほだらハあるべし。

（九〇ページ）

田畠（りやうばく、あし）に良薄（よし）あり。土に、肥磽（ひがせ）あり。薄くやせたる地に、糞を用るハ、農事の、急務（いそぎ）（とめ）なり。薄田を變じて、良田となし、瘠地を、肥地となす事ハ、これ糞のちからやしなひにあらざればあたハす。…近世ハ人多く、且飲食（のしみもの）（くひもの）のついへかぎりなきゆへ、歳にかへ、いこへをく事ハ云に及ばず、種蒔ごと年中、段々うちつゞき、間

無数、其上牛のくら直し方あしけれハ荷物をはかるふても牛にさわり牛の苦ミとなり、いろく疵杯つけ、一疋の牛にても多分損限に成事多し。假令給銀少く余分ニても農功の下人ヲ召抱可申事也。去によつて代々農業を励む百姓ハ手つから牛のくらを調、下人の遣ふ牛の鞍返心を付、或ハ調て為遣。万事無手抜ほどの農人ハいつまでも相続するものなり。

千早ふる神代にハ天の邑君をさためたまひて、穀ものゝ種を狭田長田にうゑしめたまひしより、代々生ひはひこりて芦原の中津洲も安国とゆたかに饒ひて、外ツ国にすぐれてめてたき大御国とそなれりける。しかあるを今の世となりてハ田作ることハ賤の男の業となんおもひあやまれる人もさハあれと、久かたの天か下の泰平なるも国家の安く穩なるも、みな多那津ものゝみのりゆたけき恵ミよりそおこりたることにしあれば、世の中の人ことわざしけきなかにも、殊にたふときハこの農のみちになんありける。さきにつくしの国人宮崎安貞、貝原篤信大人のものしおかれしふミにも、春の田の耕より秋の田のかり穂を廬にとり納るまでを、

(39)

もなく、しげければ、地の力衰へよハりて、發生の氣乏（すく）きゆへ、糞養（こやし）をよく用ひ、地力を助て常に（こやし）さかんにせずハ、いかにぞ、秋の収め思ふやうならんや。是によつて、糞（こやし）を（こやし）あつめたたくハゆる、ハかりことを專にすべし。

(九一〜九二ページ)

つはらにかきあらハせるといへとも、其国所によりてさむさとあたゝかさのけちめもいささかあれハ、天か下を一筋にも論ひかたくとなんありける。此むねを徳山敬猛主ふかくかんかへて、年ころ農の道にころをつくし身をはたらかしめて、このさとによく叶ひてあきの実のりの助となるへきすへを、みつからころみしりて其おもむぎをねむころに書あつめて、子孫養育草となん号て永く伝て農に幸を得んことをはかられけるハ、いとしもまめやかなるころはへになんありける。此ふみすら子孫の八十連属までもはらに守らひて農のミち常につとめ勤るものにしあらハ、一粒の種より千稲五百稲のおひたちしけりて、とし毎に幸を得て朝なゆふなに飯炊く烟もあつくたちつゝきて、新巢の癡烟の八東たるまで家とみさかえなむことしるくそありける。おのれ敬猛主のちかき友かきなれは其ゆへを一件かき添へてよともとめらるゝにまかせて、いなふねのいなともいはず、おろかなる筆を取る。文政十と世といふとしのしはす中の四日の日。かくいふハ福田の宮につかへまつる藤はらの重行。



《Materials for History》

“Nōgyōshisonyashinaigusa” by Yoshitake Tokuyama, 1826 — Reprinting by Original Text  
Haruki Kandatsu

農家子孫養育章序

先大父本名法延存者子孫為相續維子達教授と

著述志も下ハ波言を純々法信用して勅信倫

れ之ヲ象代守リ漸く早老を歴年を了るれば年乃後

強道と云二倍不獨存して同宗ノ末ニ信とて我

世海り小由幸了万方を具せり一幸小由ひくく之孫ハ安

楽亦お守るべく唯しく遺反教を考ハ其口笑ハ

月經曰三畧無安猶如火宅衆苦充滿甚可怖畏と汝

サンガイム アン ユ タク シウク ニウ エシ ジン カ フ イ  
サンカイマヤキコナナクハクク エトシ エニウククニキクナリナクテヨロルベシ